

# THE GALLERY

もくじ ■特集|special issue —中村一美《破庵(いわき破庵)》組み立ての記録 ■企画展のご案内「メスキータ」  
「ニューアートシーン・イン・いわき 小坂橋弘展」 ■常設展示室より ■学芸員ノート「アーカイブ展調査事始め」 ■今後の展覧会



## 特集|special issue — 中村一美《破庵(いわき破庵)》組み立ての記録

2020年度の常設展前期 I「収蔵作家セレクション」において、中村一美を取り上げ、常設展示室内で絵画作品を、1階ロビーに立体作品《破庵(いわき破庵)》(以下《いわき破庵》)を展示しました。

《いわき破庵》の原型は1995年に遡ります。作家は1995年に神奈川県藤野町(現相模原市緑区)で開催された野外展「フィー

ルド・ワーク・イン・藤野 '95」に、立体作品《破庵(藤野町破庵)》を制作、設置しました(図1～4)。作家は、この高さ5mにも達する今にも崩れ落ちんばかりに傾き破れた木造の庵を、材料の切り出しから組み立てまで独力で制作しました。これは、自らの絵画作品《破庵》シリーズに現れる斜行するグリッド構造を、三次元において再構築する試みでした。(次頁につづく)

《破庵(藤野町破庵)》はその後、設置された竹林の中で「崩壊」し、現存していません。

それから7年、2002年に当館で開催された中村一美の個展のために、新たな破庵——《いわき破庵》——が制作されました(図5～7)。作家の指導のもと、いわきの宮大工、志賀秀範氏ほか助手1名、および学芸員らによって当館で組み立て作業が行われました。



9 部材の確認



10 1階部分の柱を立てていく



11 2階部分の床梁を載せる

作家の構想、設計をもとに志賀氏がその場で木材を切り出し、加工。解体、再組立が可能ないように、木材をボルトとナットで結合する仕様となりました。

1階ロビーの空間に合わせ高さは3m15cmとなりましたが、2作目の立体《破庵》が、ここいわきで生まれたのです。《いわき破庵》はその後、「傾く小屋」(東京都現代美術館、2002年)「愉しき家」(愛知県美術館、2006年)に貸し出され、展示されています。その際、中村氏と志賀氏が各会場に赴き、組み立て、展示作業に

当たっています。

そして今回、当館においては実に18年ぶりとなる2020年3月28日に《いわき破庵》の組み立て、展示作業が行われました(図8～15)。再びいわきの宮大工、志賀氏ほか助手の方々をお招きし、2002年の個展を担当した当館学芸員、平野を含む学芸員4人が参加しました。

学芸スタッフは平野を除いて《いわき破庵》組み立てに立ち会ったのが初めてのこと。志賀氏の指導のもと作業に参加しつつ、ひとつひとつの部材を確認しながら組み立ての工程を写真、映像、文章で詳細に記録しました。部材には全体の中での位置、機能によって柱、床梁、屋根、筋交い、火打ちといった名称と識別用のアルファベットが振られています。なかでも唸らされたのは「頬杖」と呼ばれる部材でした(図12)。

志賀氏の助手「それは柱なの？」

志賀氏「頬杖。」

学芸員A「ほおづえ？」

平野「(頬杖のポーズをとりながら)これか！」

志賀氏「そう…ふっふっふっふっふっふっ」

学芸員A「まさに…！」

志賀氏「これやんねえと、崩れちゃうね。」

「頬杖」は、傾いた2階部分の荷重を床梁の下から支える部材。刮目すべきは、破庵全体の傾きに対して反対側からつかえ棒のように支えるのではなく、破庵全体と同じ向きに自身も傾きつつ、かろうじて支えている(ように見える)点です。

12 2階床梁を斜めに支える「頬杖」



構造上、荷重を支持するために必要な部材ではありますが、「破れた庵」として視覚上は安定した印象を与えないよう、慎重に配されているようです。まさに頼杖について居眠りをする者が、今にもバランスを崩して目を覚ますことになりそうな、その寸前の不安定な状態を思わせます。



13 2階部分の柱を立てていく



14 2階部分を組み上げていく…完成間近!

を実現するべく木材の切り出し方、組み合わせ方における知恵を絞り出すいわきの宮大工の化学反応。今回の組み立て作業を通して、まさにここ、いわき市立美術館で作品が生まれたという場の熱量を追体験することができました。

展示期間中、幸いにも中村氏が来館され、組み上がった状態をご確認いただきました。制作から18年を経てもなお、木材に反りや狂いが生じていなかったことにとりわけ驚かれたようです。志賀氏の宮大工としての技量が作品にとって重要な役割を果たしていたことがわかります。

今回の記録をもとに、詳細な破庵組み立てマニュアルを作成中です。定期的に展示をし、組み立てのノウハウを継承することで、学芸スタッフの世代交代を経てもなお作品を展示



15 展示風景

できるよう目指します。

90年代に制作が始まった絵画の《破庵》シリーズは、バブル崩壊や阪神淡路大震災を経験した日本社会の「崩壊」、あるいは作家の個人史における「崩壊」を反映するものとして制作されました。その後もこのシリーズは個展やグループ展において制作、発表され続け、2001年の「9.11」、2011年の「3.11」といった、各時代に起こる社会の「崩壊」を前にして、意味を提示してきました。おそらく社会は、この先もあらゆる崩壊を経験し続けるでしょう。《いわき破庵》が、そのような崩壊する社会を前にして再び建ち上がり、意味を提示することができるかどうかは、美術館にかかっていると言えるでしょう。展示することは所蔵館の使命なのです。

(学芸員 徳永祐樹)

常設展前期 I

収蔵作家セレクションvol.1 中村一美

特別展示《破庵(いわき破庵)》

4月1日(水)～6月21日(日)(現在は展示終了)



左から  
《ヤープ・イエスルン・デ・メスキータの肖像》  
1922年 木版  
Photo: J&M Zweerts

《ワシミズク》  
1915年 木版  
Photo: J&M Zweerts

《シマウマ》  
1918年頃 木版  
Photo: Martin Wissen  
Photography, Borken, Germany

サミュエル・イエスルン・デ・メスキータ(1868-1944)は、19世紀末から20世紀前半にかけて、オランダで活躍した画家、版画家、デザイナーです。本展には多彩な技法による絵画や版画約230点が出品されますが、中でも、明暗のコントラストとシャープな線による簡潔な表現が印象的な木版画は、メスキータの真骨頂といえるジャンルでしょう。版画の下絵となるドローイングや複数のステート(制作段階の試し刷り)など

は見どころのひとつです。

「エッシャーが命懸けで守った男。」と謳うキャッチコピーの通り、ユダヤ人ゆえにアウシュヴィッツ強制収容所で亡くなったメスキータの作品は、教え子のM.C.エッシャーら友人や知人たちによって守り抜かれました。本展は、そんなメスキータの日本初の回顧展です。その知られざる魅力をお見逃しなく。

## ニューアートシーン・イン・いわき 小板橋弘展

9月12日(土)～10月25日(日)

1959年宇都宮市に生まれた小板橋弘は、フリーデザイナーとして活動していた20代半ばから独学で日本画による表現を模索し始め、作画に集中するため、1991年いわき市川前町に移住しました。電気も電話もない大自然の中での生活に向き合いながら、デザイナー時代に培った感性や技術と日本の伝統技法とを融合させた「新しい風景表現」を探求し作画生活を続けました。

手すきの和紙に墨や岩絵具で描かれた風景の数々は、現代社会の利便や喧騒を離れ、孤独ともいえる環境で己を研ぎ澄ましてたどり着いた「桃源郷」のように感じられ、穏やかで静寂で凛としていて、時にユーモラスでもあります。

本展では、最新作を含む16点の作品により、どこか懐かしい「別天地」に心遊ばせる機会を提供したいと考えます。

【作家来館日時】9月12日、21日、10月4日、18日の14:00～15:30



《月夜》  
2002年 岩絵具・麻紙



《いのちの海》  
2014年 岩絵具・麻紙

この機会に、ぜひ、作者と親しくご歓談ください。

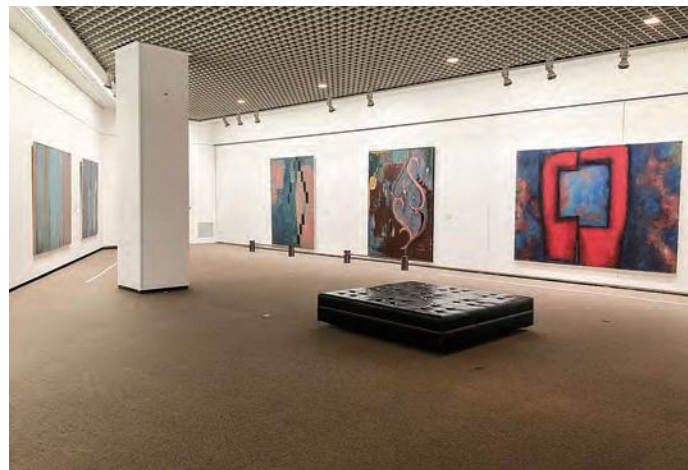
## 常設展示室より



戦後美術を代表する重要な作家の体系だった作品収集に努めてきた当館では、昨年度から常設展において「収蔵作家セレクション」と題したシリーズを続けています。現在取り上げているのは、イケムラレイコ(1951-)と辰野登恵子(1950-2014)の二人です。

昨年国立新美術館とバーゼル美術館で大規模な回顧展が開催されたイケムラレイコのコーナーでは、1980年代のドローイング、混じり合い滴り落ちる水彩絵の具によって少女を描く「シャドウ・ガール」と称されるシリーズ、黒や赤、青の茫洋とした空間の中でぼんやりと佇む少女の姿が描かれた繊細な油彩作品など、収蔵品と寄託作品をあわせて18点展示しています。中でもスペインの美術大学を卒業後、スイスで画家としての一步を踏み出して間もない頃に手がけた寓意的なドローイングは見どころのひとつで、その後多様な展開を遂げるイケムラの表現の源泉となるようなイメージが見て取れるでしょう。

イケムラと同年代の辰野登恵子は、1970年代から点や格子、ストライプを用いたミニマルな版画で注目を集めていました。今回展示しているのはその時期を代表する3点で、既製の野紙を幾度もコピーして写真製版し複数の色で重ね刷りしたシルクスクリーンです。版を少しずつ目止めする手法に



よって現れた色の変化が特徴的なこの作品を経て、やがて辰野は、筆で塗り重ねた絵の具をナイフで削って完成させた重厚な画肌の油彩作品を手がけるようになります。本展ではそれら70年代から90年代までの作品を紹介します。

複数の作品によって一人の作家を紹介する「収蔵作家セレクション」では、制作時期や技法が異なる作品を年代順に辿ったり、近い時期に制作された同じタイプの作品を見比べたりすることが可能です。それは、作家の思考や制作姿勢の変遷、あるいは一貫性などに触れる機会となり、作家への理解が深まるきっかけとなり得るでしょう。個々の作品の主張に目を凝らし、作品同士がもたらす反響や共鳴の中に身を委ねてみてはいかがでしょうか。

(学芸係長 竹内啓子)

常設展前期Ⅱ 6月30日(火)~10月25日(日)

色彩と形態をめぐる

収蔵作家セレクションvol.2 辰野登恵子・イケムラレイコ

## 学芸員ノート「アーカイブ展調査事始め」

現在、いわき市立美術館そのものに焦点を当てた展覧会を計画している。具体的には所蔵作品とアーカイブ資料を展示する算段だ。アーカイブ資料とは、ここではチラシやパンフレット、写真、メモ、記事など、美術作品以外の種々雑多な資料を指す。いわき市立美術館にはそれらが職員たちの手で集められてきており、普段は表に出ることのないそういった資料からは、開館に関わった人々の存在や当時の試行錯誤、その後の様々な取り組みの苦労と喜びが浮かび上がってくる。

いわき市が美術館設立に踏み切った大きな契機が「いわき市民ギャラリー」という市民団体であったことを知る人は、おそらく年々減っている。彼らは当時の文化センターで「ヘンリー・ムーア展」など大規模な展覧会を開催した他、市民のための美術館設立を要望し、そのための自主的な研究会を執り行った。市民らの手で来場者2万人以上にも及ぶ展覧会を成功させたという、そのエネルギーと実行力に驚かされるし、いわき市史としても絶えず発信していく必要性を感じる。

当館の所蔵作品の最大の特徴は「戦後の現代美術」という言葉に集約されるが、そのうち50点余りは、今では「大光コレクション」と呼ばれる、新潟の地元企業コレクションの一部であった。同時代の現代美術を紹介するものとして非常に先進的であった「大光コレクション」が経営的な事情から手放されることになった際、購入者として手を挙げた者の一人が、美術館設立に向け具体的に動きだしたばかりのいわき市であっ



左：開館直前の「美術館ニュース」

右上：美術館のシンボル、くすのきの植樹 右下：開館前後の資料

た。資料を紐解くことで、作品が様々なめぐり合わせを経て私たちの前に在ることが浮かび上がる。

興味のある展覧会に行く、学校の活動の一環で行く、イベントに参加する等々、美術館という場所は、通常は断片的な体験として記憶されている。

そこに新たな視点を持ち込むこと——美術館という場所に生成するドラマに目を向け、美術館の軌跡を明らかにすることは、一つの生きた存在として美術館を提示し直すことになるのではないだろうか。

(主任学芸員 太田紋乃)

### 今後の主な展覧会のご案内 (新型コロナウイルス感染症の拡大状況により、中止や延期、または内容等に変更が生じる場合があります。)

#### 企画展

##### メスキータ

9月12日(土)～10月25日(日)

##### ニューアートシーン・イン・いわき 小板橋弘展

9月12日(土)～10月25日(日)

##### いわき市小・中学生版画展

令和3年1月5日(火)～1月24日(日)

##### 第50回いわき市民美術展覧会

〈書の部〉令和3年2月5日(金)～2月14日(日)

〈絵画・彫塑の部〉令和3年2月19日(金)～2月28日(日)

〈陶芸の部、写真の部〉令和3年3月5日(金)～3月14日(日)

※10月26日(月)～令和3年1月4日(月)

館内メンテナンスのため臨時休館

#### 常設展後期

##### 意味する美術

収蔵作家セレクションvol.3 松田松雄・緑川宏樹

令和3年1月5日(火)～3月31日(水)